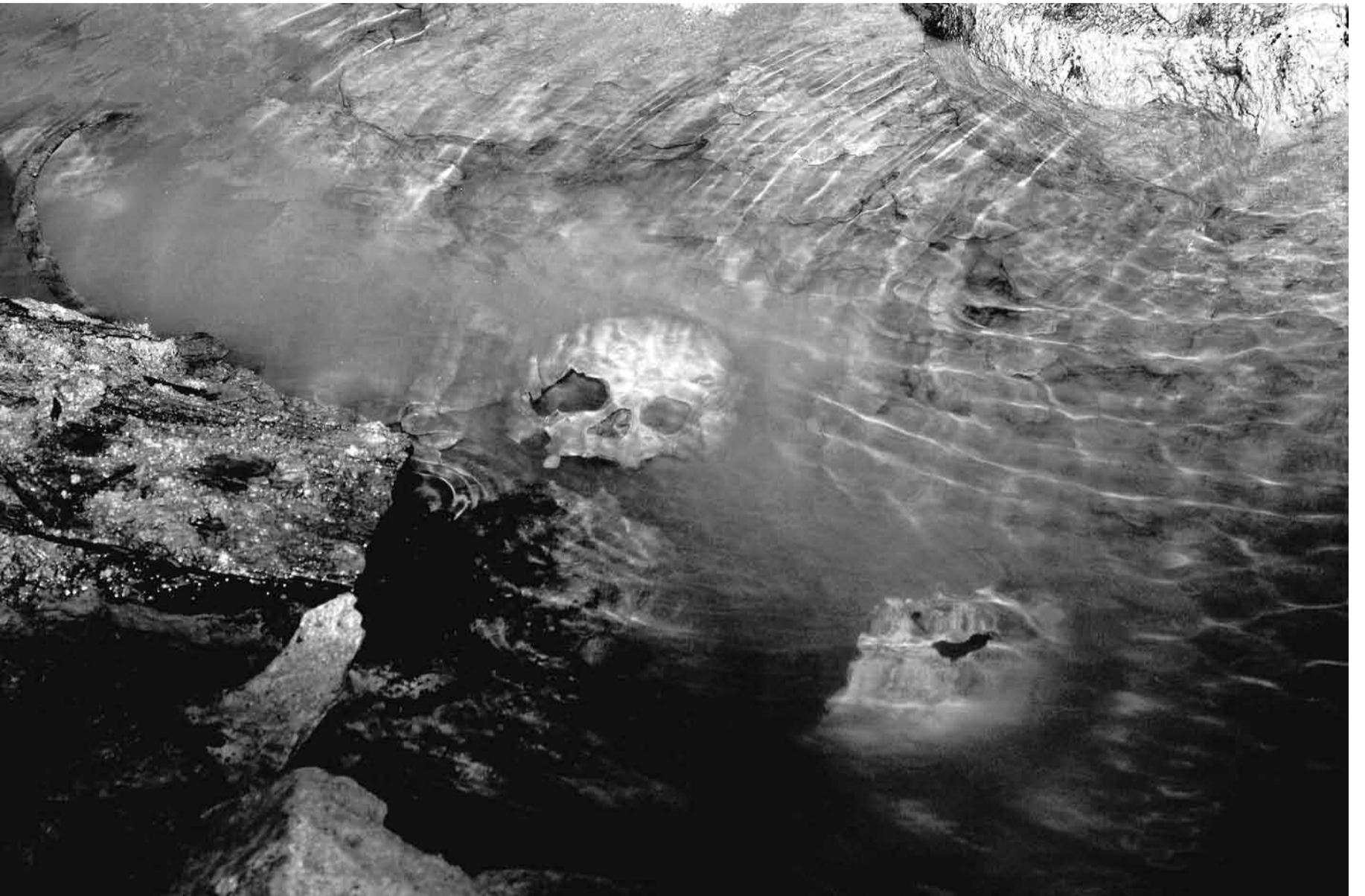


2019-5-1
No.1040 500円

思想運動

天皇制支配の強化に抗して 2~5面
辺野古現地闘争に参加して 6~7面
関西生コン弾圧に抗議と支援を！ 8面
「ベネスエラに連帯する集い」開催 9面
『山猫』をめぐるシチリアの旅 10面
書評特集＝日本人の明治観をたぐす、他 11面

洞窟の中で水没している遺骨たち(二〇一三年 糸満市) 豊里友行写真集「遺骨が呼んでいる」国吉勇さんの遺骨収集人生(二〇一八年九月刊)より



沖縄県民は問いつづける なぜ天皇の名の下、無念の死を強いられたのかを

豊里友行

国吉勇さんは、沖縄戦犠牲者の遺骨・遺留品の収集活動を約六〇年あまり続けてきた人物である。一九三九年生まれの七九歳。旧・真和志村に生まれ、六歳で沖縄戦を体験した。沖縄戦で祖母、母、三男、弟(当時一歳)、姪っ子(当時一歳)の五人を亡くす。羽地村(かつて沖縄県、戦後は琉球政府の国頭郡にあった村で、現在の名護市北西部にあたる)仲尾次の共同墓地で叔母さんたちによって自分たちで火葬して厨子甕に収めるのを国吉さんは小学校四年か五年の頃に見たことを記憶していた。

沖縄戦の激戦地のひとつ、那覇高校の向いの城岳にある陣地壕に、子どもたちのころ、探検ごっこをして壕内に入ったことがあったと言う。そこには軍服や着物を着た人、畳の上に寝かされたままの死者が転がっていた。その後、この体験がきっかけになって国吉さんは何かに駆り立てられるように一八歳か一九歳から友だちと遺骨収集を始めるようになった。やがて友人は仕事などが理由になって遺骨収集をできなくなったが、国吉さんだけが遺骨収集を続けてきた。

毎日のように遺骨収集に出かけた。長年の遺骨発掘で腰痛は持病になった。腰に磁気ベルトをつけて痛みを和らげての作業だった。国吉さんの遺骨収集への情熱はどこからきているのか。

その国吉勇さんの遺骨収集に二〇〇七年十二月から同行取材をすることができた。国吉さんは、亜熱帯の植物群が生い茂るジャングルを鎌で切り開きながら、言うように進む。沖縄戦当時、足の踏み場もないほど死体が転がっていたというその獣道にわたしも足を踏み入れた。国吉さんは、戦場を知る生き証人から話を聞いたうえで発掘に赴くこともある。「こんなとんでもない作業をされていたのか」と後に続くわたしはたじろいだ。六〇年あまり続けてきた遺骨収集の道のりは、決して平坦ではなく、国吉さんが自らの手で切り開いてきたものだった。

当時、米軍の攻撃を避けて人々が逃げ込んだ洞窟の奥へとわたしも足を踏み入れた。洞窟の空洞は、はらわたのようになっていて、頭蓋骨がひっそりと水底に沈んでいる。頭蓋骨がわたしを見つめているようで、シャッターを切った。

わたしは自身に尋ねる。なにゆえに沖縄戦の遺骨たちを撮影するのか。こちらを見つめる頭蓋骨の眼窩にわたしは歴史の残酷さを見て身震いする。国吉さんが遺骨収集をしながら見つめてきた人骨、遺留品をいまわたしもまた見つめている。それは一人の名もない戦没者の「死」を見つめる作業でもあった。

はたして、わたしは二十数万余の沖縄戦没者のうち、何人の死者の「死」を見つめることができるだろうか。数字ではない一人一人の死に向き合うことで、歴史は実感を持って継承されていくと確信する。

ふと思った。戦没者との対峙する行為を通して国吉勇さんは、遺骨が呼んでいるように思える。国吉さんの長年の遺骨収集を支えてきたものは、戦没者との対話だったのか

もしれない。沖縄戦を体験することもなく、平和呆けて戦世を知ろうともしないわたしたちの世代が、国吉さんから何を学ばなければならぬのか。わたしは写真家で俳人として、水底に沈んだ頭蓋骨の眼窩が何か伝えようとしていることに心底打たれる。死者の語りから向き合えば、未来は手練り寄せられない。国吉勇さんは、遺骨を約三八〇〇柱、遺留品を一〇万点以上も拾ってきた。身元が判明した遺留品を遺族へ返す活動もしている。遺骨収集のボランティア団体も国吉さんを手伝ってくれているが、沖縄での遺骨収集をどうやって次世代に引き継ぐかは大きな課題である。それは沖縄問題ではない。日本国民全体の問題なのだ。

戦後七三年は、死者たちの終わらない戦後でもあった。国家に見捨てられていた戦没者の遺骨たちや沖縄戦の遺留品たちの存在は、何を語りかけているのだろうか。

わたしは、本書の国吉勇さんの遺骨収集人生を通してその遺骨収集の担い手の継承と遺留品による沖縄戦を語り継ぐ課題への手助けになればという一念で写真集を出版することに決めた。それは国吉さんの遺骨収集を通して沖縄戦についてわたしなりに向き合うことにもなった。だからこそ国吉勇さんが、遺骨収集を通して沖縄戦の戦没者の一人一人に対峙して遺骨たちや遺留品たちを拾ってきたことを多くの人たちにも共有してもらいたい。

「豊里友行写真集 遺骨が呼んでいる」国吉勇さんの遺骨収集人生「あしがき」より。タイトルは編集部。